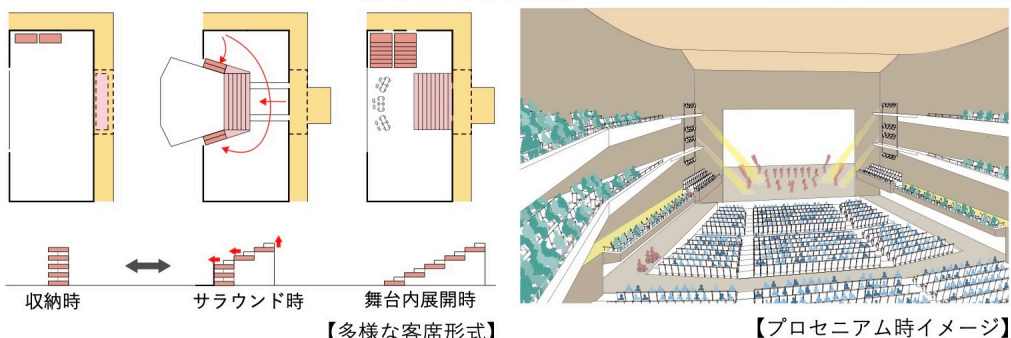
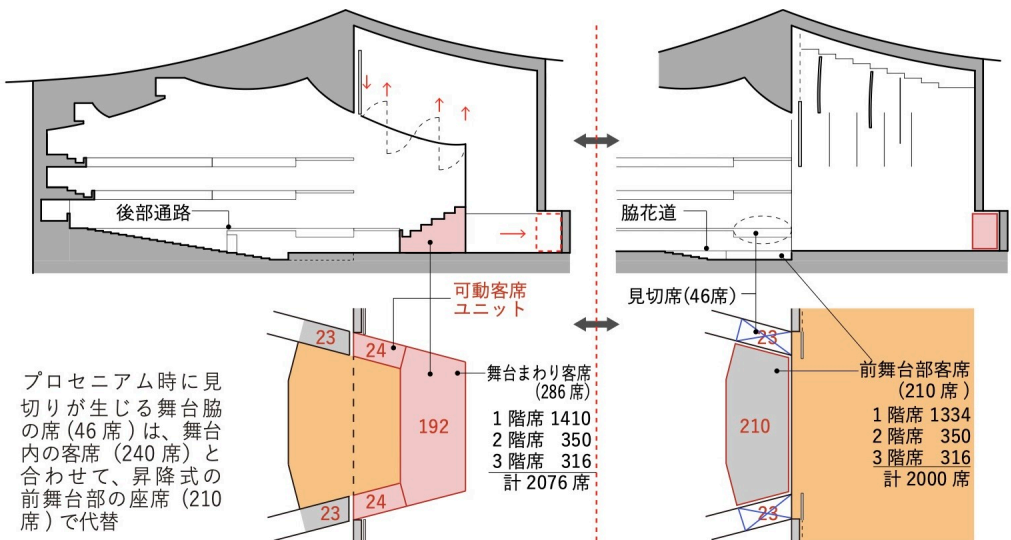


音楽ホールと震災メモリアル複合施設として、求心性をもつホールと発信性の高いホールを設け、8の字状の回遊動線をつないでいきます。

■音楽主体の大ホール（閉じた円環）

- 実績ある仙台フィルのホームとなることから、大ホールはサウンド形式をベースとして、それに応じた舞台機構やフライターとしてします。
・舞台内に設ける客席（240席）は正面 / 側面反射板と分離し走行式の可動ユニットとすることで、上部の吊り物への制約を減じます。

- 1F客席内に横通路と連続する脇花道を設け、後部通路は舞台背面の座席まで連続させます。回遊性があることで、客席の一体感を生み出します。車椅子席配置の自由度も高めます。
・舞台背面には6列の客席を配置し、サウンド時の囲まれ感を演出します。それに対応した入口も設けます。



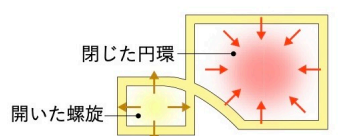
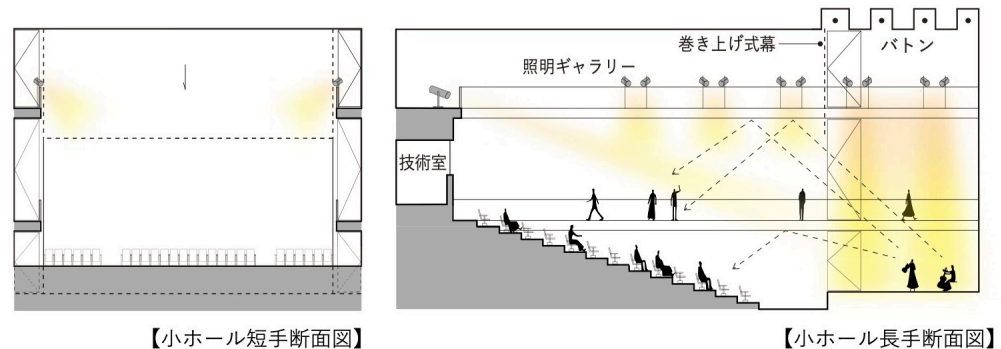
- 可動客席ユニットは3分割し、伸縮式のものとします。プロセニウム時にはコンパクトに収納することができます。

- 客席ユニットの組み合わせをえることで、多様な鑑賞形態を作り出したり、合唱席として利用することが可能です。

■シューボックス型の小ホール

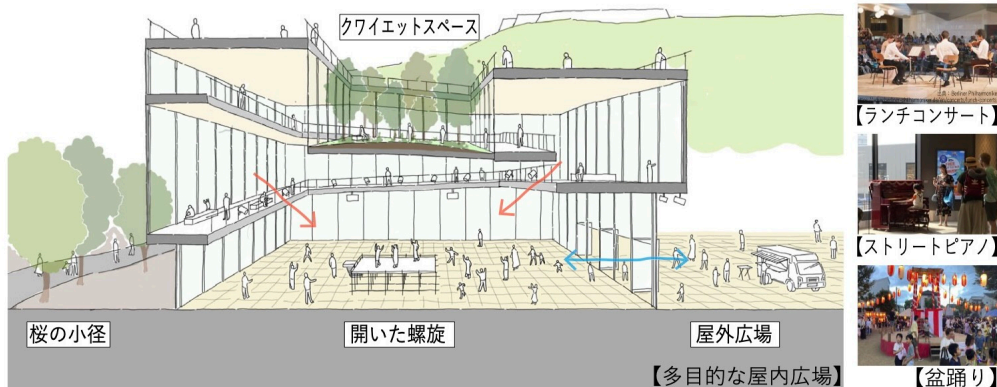
- 音響に優れたシューボックス型の空間構成で、照明ギャラリーを音響ソフィットとして、アンサンブルなどに適したホールとします。

- 巻き上げ式の幕と袖扉によりプロセニウムを形成し、上部に設けた3方の照明ギャラリーにより、多様な演出ができるようにします。



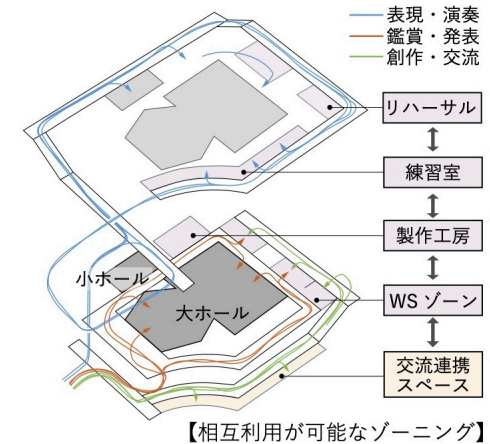
■多目的な屋内広場（開いた螺旋）

- 災害文化創造支援 / 発信エリアと連携した震災関連のイベントや日常的なランチコンサート / ティーダンスにも用いられる場所とします。
・巡りながらゆるやかに昇っていく幅広のロープは、展望台やパフォーマンスの観覧席となるとともに、市民が気兼ねなく滞留し、憩うことのできる場所となります。



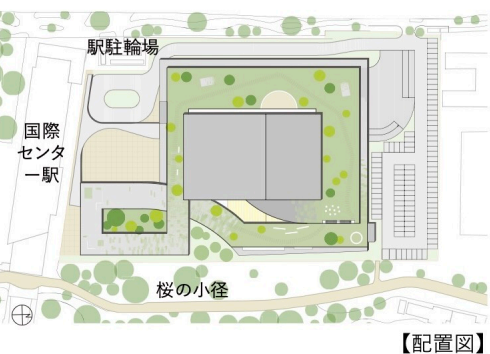
■裏をつくらないゾーニング

- 大ホールの舞台背面にワークショップゾーン、製作工房、リハーサル室を設け、行き止まりや裏をつくらない計画とします。
・創作活動に用いられる交流連携スペースとワークショップゾーン、製作工房は隣接させ、相互利用が可能なゾーニングとします。



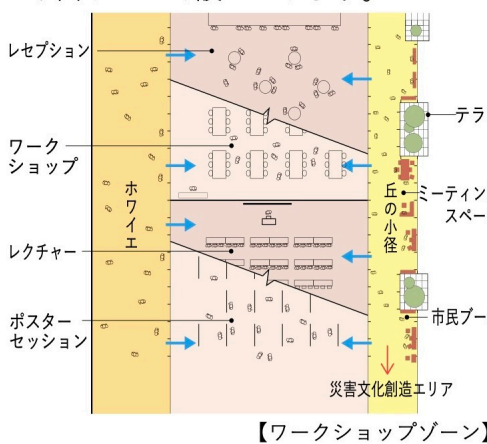
■憩いの場としての屋上庭園

- 緩やかに起伏し、緑化された屋上に居場所となるような小さな広場や東屋を設け、全体の回遊動線の一部と位置づけます。

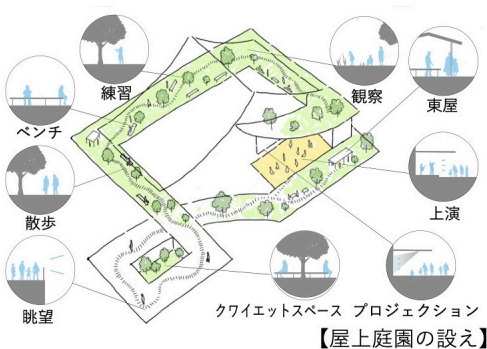


- 駅前の屋外広場と連続する位置に設け、内部での楽しい様子が屋外からうかがえる計画とします。桜の小径からも気軽に訪れることができます。
・スロープは照明、音響等の舞台演出の基地としても用いられます。中央部には、市民による上演活動のきっかけとなる台座のような可動檣を常設することを提案します。

- ワークショップゾーンはホワイエと丘の小径の双方からアクセスでき、個別貸出が可能です。日常的なワークショップに加え、学会時のレクチャー / ポスターセッションにも対応します。
・丘の小径のアルコーブに災害文化創造や文化芸術創造の市民活動がにじみ出していく設えとします。

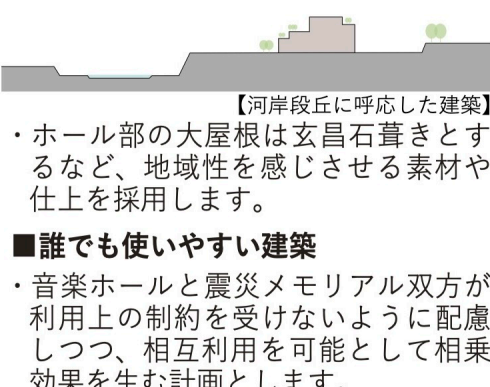


- 大屋根の軒下空間は憩いの場となります。街を見晴す屋外上演も可能です。



■ランドマークとなる建築

- 仙台における青葉城の位置づけを深く理解し、杜の都にふさわしい景観をつくり出す建築とします。
・広瀬川の河岸段丘上に位置する敷地特性を活かし、その地形や風景と呼応する建築の姿を具現化します。



■誰でも使いやすい建築

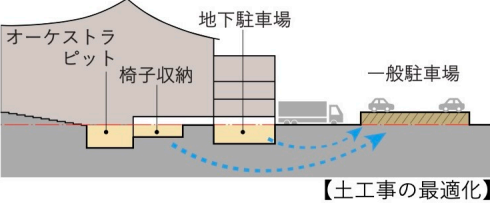
- 音楽ホールと震災メモリアル双方が利用上の制約を受けないように配慮しつつ、相互利用を可能として相乗効果を生む計画とします。
・各車両のアクセスは駐車場の入口部分で区分し、それぞれが支障なく利用できる計画とします。

■高い性能を保持する建築

- 耐震をはじめとする様々な防災 / 減災性能を備え、災害に対する冗長性をもった建築として計画します。
・ホールでの居住域空調、共用部でのエアフローウィンドウの採用、再生可能エネルギー活用により、環境負荷の少ない建築とします。

ライフサイクルで考える

- 建設段階だけでなく、維持管理を含めたライフサイクルでのコスト（LCC）削減を考慮します。



フレキシビリティをもたせる

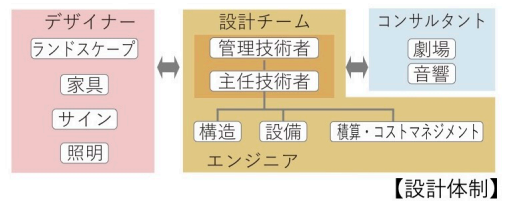
- 吊物機構の更新の際、荷重条件の変更に際して対応できるように、フライ部分の構造はあらかじめ積載荷重のゆとりを見込んだものとします。
・建築設備に加え、舞台機構 / 照明 / 音響設備を含め、機器の保守点検のための適切なスペースや入れ替えの際の安全なルートを確認します。

■市民と併走する設計プロセス

- 市民 / 文化団体に新しい建物への理解と愛着をもっていただくよう、ワークショップ等を開催し対話型のプロセスで設計を進めていきます。
・仙台フィルによるプレコンサートや、市民による檣上でのパフォーマンスなど、「開いた螺旋」を活用して正式な開館前から発信活動を行います。

■充実した設計体制

- ホール / 公共建築の設計実績がある管理技術者と、家具什器の製作もできる機動力のある若手建築家との協働体制で取り組みます。
・構造 / 設備エンジニア、劇場 / 音響コンサルタントなど、種々の専門家とコミュニケーションをとりながら設計を進めます。
・ランドスケープ / 家具 / サイン / 照明など各分野のデザイナーをチームに加え、市民に愛される質の高いデザインを実現します。



コスト削減に関する提案

- 大ホールの舞台は地上レベルとして、地下工事を駐車場や機械室、オーケストラピットなど最小限にとどめ、発生土は駐車場のかさ上げに転用し、建設コストを削減します。
・フライターの高さを抑え、可動客席ユニットを分割収納して、面積をコンパクトにし、コスト比重の高い舞台部のボリュームを削減します。

将来の大規模改修を想定した設計上の配慮

- 各部の動線がデュアル化されていることにより、ゾーン全体を閉鎖せずに室単位で使いながら改修を行うことが容易です。

